ここはどういう場所で、どんな暮らしがあったのだろう
地域資源を再発見／再認識／再考する

RE：プロジェクト通信

しんらい

武田こうじ

なつがさり
だけど
まだここに
はるがいて

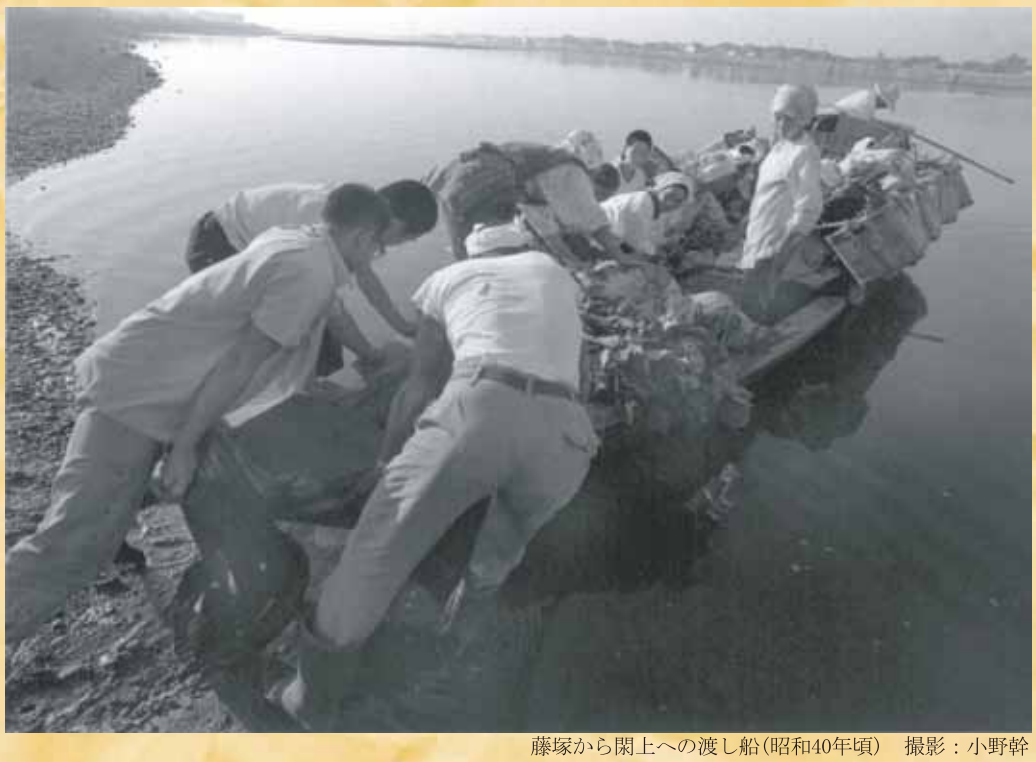
ちがう
くうきが
そらが
ビルが
ひとみのおくが
へやのなかが

ちいさなふねが
まちとまちをつないでいたはなしをきいた

みずがまちを
しんらいしていたときのはなしをきいた

もっとはやく
もっとおおきくと
くりかえして
わたしたちはなにがほしかったのだろう

14:46まえのせかいに
でかけて
どうしてと
こころをたたいた



藤塚から閖上への渡し船(昭和40年頃)　撮影：小野幹

〈仙台市 藤塚〉

この街で繋いできたこと 2

この地域を知るためのメモ

仙台市若林区
藤塚（ふじつか）地区

3・11その時

今回お話を聞いた渡辺理一朗さんは、消防団の呼び掛けを聞いて、奥さんのもよ子さんと一緒に車で東六郷小学校へと避難した。斎久雄さんは、畑の作業場の2階にいたところを、息子さんに促されてようやく東六郷小学校に避難した。「2階にいれば大丈夫」と思ったそうだ。その理由の一つは、2010年2月に起きたチリ地震。一時大津波警報が発令され、藤塚でも多くの住民が避難したが、結局津波による被害はなかった。「それで今回も津波は来ないと思った人も多かった」と渡辺さんは話す。
避難先の東六郷小学校にも津波は到達し、1階は浸水。校庭にあった車も一瞬で流されていったという。渡辺さんはもよ子さんを小学校に送り届け、車に戻ったところで津波を目撃。そこから更に車で逃げ、もよ子さんと再会できたのは次の日だった。

仙台の母なる川、広瀬川。遠く奥羽山脈の森に生まれ出た水が45キロにわたって低きへと流れ、名取川と合流してさらに下り旅を終えるところ、その河口に「藤塚」はあります。

川の対岸は、閖上（ゆりあげ）。集落の東は貞山堀（ていざんぼり）に接し、その外側には井戸浦（いどうら）、そして広大な太平洋が広がります。標高1メートルにも満たない、海や川や堀の迫る地勢からは、ときに水害の苦難と闘いながらも水の恩恵を受け営まれてきた藤塚の集落の暮らしが見えるようです。

集落の中心は、南東端に鎮座する五柱神社（ごちゅう）でした。広い境内に堂々とした社殿とフジの大木を誇っていた神社は、この大津波で押し流され、無惨にも狛犬とわずかな石碑を残すのみとなってしまいましたが、その歴史は中世までさかのぼります。

江戸時代にまとめられた仙台藩の地誌「封内（ほうない）風土記」は、康平3年（1060）、源頼義、義家の親子が奥州征伐の際に常陸国に勧請した神社が、のちにこの地に遷されたと伝えています。また、社殿の棟札には、筏（いかだ）に乗って五社の神様がこの浜に漂着し、その筏に編まれていたフジツルが根を下ろし地名の由来となったこと、伊達政宗が狩りの途中にこの地に立ち寄り、言い伝えを聞いて社殿を改築したことが記されていました。

フジの大木には、この下をくぐり抜けると病気をのがれるという言い伝えがあり、藤塚の人々は、春と秋には手づくりの行灯を立てて祭りを楽しみながら、神社を守り続けてきました。

川や海での漁のほか、稲作に加えて畑作が盛んで、集落のまわりの畑では黒々とした土に堆肥をすき込み1年を通して野菜が栽培されてきました。収穫した野菜は大きな竹籠に詰め込んで、渡し船で閖上へ。海辺の町へ船で渡りお得意さんをまわる行商は、昭和47年9月に閖上大橋が完成するまで続きました。町場だった閖上との交流は生活全般に及びました。表紙の写真は、沈み込むほどに野菜を満載した船を、いざ閖上へと押し出そうとする藤塚の人々。一人立つ女性が、今回取材でお会いした渡辺もよ子さんです。

そして秋、稲刈りが終われば、海岸沿いに茂る茅原で茅刈りが始まりました。屋根材や壁材として需要の多かった茅はすでに江戸時代から生産され、人々はその収入を村づくりの資金にも活用してきたといいます。まわりの自然環境を巧みに利用しながら、いくつもの生業を持つ暮らしが、ここには息づいていました。

今回取材でお会いした方々は、大津波の直前まで畑仕事に精を出し、野菜を売りに出るという暮らしを続けていました。藤塚は明治22年に六郷（ろくごう）村となり、昭和16年に仙台市に編入されていますが、100万都市でいまなおこうした暮らしが営まれてきたことに驚かされます。

▲津波を受けた後でも、フジは力強く松の木に絡みついていた。（2011年6月撮影）

【参考文献】
・平凡社地方資料センター編『宮城県の地名』平凡社、1987年
・角川日本地名大辞典編纂委員会『日本地名大辞典　4宮城県』角川書店、1979年
・木村孝文著『若林の散歩手帖』宝文堂、2000年

編集後記

私が藤塚を初めて歩いたのは今年の6月。震災が起きた後です。津波が襲う前の風景を知らないにも関わらず、一緒に歩いた渡辺理一朗さんのお話を聞いていると、かつてのこの街での生活の営みがいきいきと立ち上がってくるようでした。それは、後日渡辺もよ子さんと斎久雄さんのお話を聞いた時もそうでした。自らの手で野菜を育て、食べる人に手渡しできる喜びはどのようなものだったのだろうか。名取川の対岸に見えた閖上は、どれほど輝いて見えたのだろうか。伺う話から想像が膨らみ、私の中で「藤塚」が出来上がっていきます。

目の前にはもう、かつての街の姿はありません。しかしながら、多くの方に『RE：プロジェクト通信』を読んでいただくことで、その「かつての街」を思い浮かべていただけるのであれば何よりです。（田）

次回は
12月ごろに
発行予定です。
ウェブサイトも
ぜひご覧ください。

◆ウェブサイト
http://www.sendaicf.jp/contents09.html
◆ツイッターアカウント：RE_project

『RE：プロジェクト通信』第2号　2011年10月発行
【主催】仙台市・財団法人仙台市市民文化事業団
【編集・発行】財団法人仙台市市民文化事業団　事業課事業企画係
〒981-0904　仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5　TEL:022-301-7405／FAX:022-727-1874／info@sendaicf.jp

※この紙はリサイクルできます。